

【アジスアベバ大学について】

アジスアベバ大学は、首都アジスアベバにある同国最大の大学である。1950年に当時のエチオピア皇帝ハイレ・セラシエ1世によって設立された。

【コース内容紹介】

1) エチオピア諸言語の語学研修について

AAUでは、現在、言語学科に併設される言語研究所(Institute of Language Studies: ILS)において、外国人むけのアムハラ語コースが通年開講されている。週4回各90分の授業で月額580US\$の受講料および最初に入学金100US\$が徴収される。

今回のITPによる現地語研修については、オロモ語およびシダマ語を対象とするため、既存のコースを活用することはできない。また、アムハラ語のコースについても、新学期の開講(9月及び3月)に間に合わない場合は、受講は実際的でないと考えられる。

今回の研修では、社会科学部人類学科のEFS関係教員が責任者として担当し、カウンターパートとして日常的な支援を行う。研修は各言語を専門とする言語学科教員と協力して行われるが、上級への進行にともなって、当該院生の研究テーマと調査地域に対応した語学研修のプログラムを独自に用意することとした。

なお、今後提供可能なエチオピア諸語には、教員の人材からみて、オロモ語、シダマ語、アムハラ語の他に、ティグレ語、オモ系諸言語、ソマリ語、コンソ語を含むクシ系諸言語、スルマ系諸言語が考えられる。これらの言語の研修についても、事前に依頼をしておけば今回と同様の仕組みで実施することができることが確認できた。

2) 研修費用について

当初AAUにおけるITP語学研修の費用負担は、個人研修の形態をとることから、既存の外国人向けのアムハラ語コースの額を下回ることはできないという感触であった。また、担当教員の職分、研修中の臨地語学研修の実施場所にも配慮することが示唆された。

研修費用については、京都大学アフリカ地域研究センター時代からの部局間交流の経緯も勘案し、かなり安価な額(月額500US\$以下)で担当教員が請け負ってもらうことになった。今後、協議をすすめていくなかで適正な額を調整していく必要があると考えられる。現段階では額を固定しないで、院生による研修の評価なども勘案して、今後も交渉を続けることとした。

3) 宿舎について

AAUでは、キャンパス内に学部学生用の学生寮があり、無料で提供されているが、大学院生はすべてキャンパス外に自前で居住することになっている。この他に、外国人教員や客員研究員が借りられるゲストハウスが2箇所あるが、常にふさがっている状態で、かつ市内の長期滞在が可能な格安アパートなどに比して非常に高額である(月額30-50\$)。

アジスアベバは他のアフリカ諸国の首都に比べて例外的に治安がよく、外国人が長期滞在するアパートやホテルも多数ある。ホームステイという選択肢も可能である。したがって、通学のコストはかかるが、大学キャンパス内に住むことは当初より考慮にいれてこなかった。言語研修中に一般の人々との日常的な会話をおこなうこともキャンパス外に住むことの利点として考えられるだろう。

4) 滞在中の緊急連絡方法について：

研修をおこなう院生には携帯電話を購入させ、緊急時に連絡がとれるようにした。それぞれの携帯電話番号、滞在先の位置、電話などの情報を関係者が共有し不測の事態にそなえることとした。院生には大使館への在留届を提出させ、領事と定期的な安否確認をおこなうよう依頼した。

社会科学部人類学社会学学科のEFS関係教員が責任者をつとめ、同学科のDr. Mamo Hebo氏 (Assistant Professor) が緊急時の窓口となる。連絡先(携帯電話)は、+251-9-11-671867、電子メールはmamo@jambo.africa.kyoto-u.ac.jpで、いずれも日本語での連絡が可能である。

5) 学生への臨地教育について

今回AAUに派遣された2名の院生は、拠点担当教員と同時に現地入りして、当初から各院生の研究課題に沿った語学研修と臨地教育を有機的に組み合わせて指導をうけることができた。

また、2002年に21COEプログラムにより設置されたエチオピア・フィールドステーション(EFS)が京大をはじめとするエチオピア研究者の連絡拠点として機能しているので、言語研修中の院生がEFSの機能を活用して研究課題に関する情報を収集したり遠隔地から指導をうけたりすることが可能になっている。

6) 将来的な連携強化について

ASAFASアフリカ地域研究専攻はその前身のアフリカ地域研究センター時代からアジスアベバ大学と部局間交流をさかんにおこなってきた。また、EFSを設置して、フィールドワークによる地域研究というアプローチをひろめてきた。今年度よりグローバルCOEプログラムによって継続されることになったEFSをITP研修生が大いに有効活用できる態勢が整えられている。

AAUは、近い将来、京都大学と大学間交流協定を締結することを強く希望している。ITP研修事業を円滑に継続していくためにも、大学間交流協定の締結が望まれる。